

保育者養成課程に在籍する学生の自己評価と 子どものイメージとの関連

芝崎 良典¹

The correlation between perceived-child image and self-evaluation

Yoshinori Shibasaki¹

The present study examined the relationships between the perceived-child images, assessed with semantic differential method and the self-evaluation, based on the premise that teachers' perceptions of children are closely linked to their self-images. The data showed that individuals low in evaluation on personal and social standards provide negative perceived-child images than individuals high in personal and social standards. The data supported that hypothesis that subjects low in evaluation on personal and social standard have negative perception to objects. I discussed these results from the view of understanding about appropriate teacher's characteristics for early childhood education.

Key Words: child image, self evaluation, perception

保育の原点は子どもの観察をすることであり、子どもが保育の場でどのような状態にいるかを的確に把握することにあると考えられている(森上・高杉・柴崎, 1999)。保育活動とはこうした子どもの姿を把握することを出発点として、保育計画の立案、実践と反省という諸々の下位活動が円環上につながっている活動であると言えよう。すなわち、子どもを観察し、その姿を的確にとらえ、どのような介入や環境構成をするかといった保育計画を立て実践し、その実践中に再び子どもを観察し、その姿を把握し計画の問題点を反省し新たに計画を立て直すという具合に諸活動がひとつの円環として結びつけられる活動が保育活動である(図1)。そのため、自己評価によって子どもの知覚がゆがめられる場合、後の諸活動にも影響が及ぶ可能性がある。すなわち、子どものとらえかたにゆがみがある場合、それを元に作成

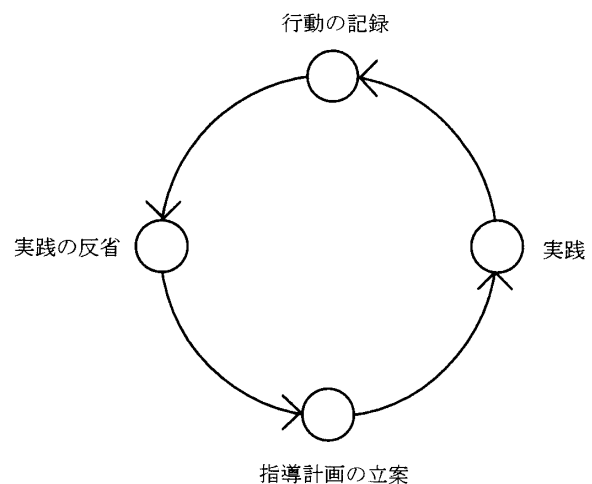


図1. 仮説性のある指導計画の立案過程
注：円が各過程を表し、矢印は過程の推移を表している。指導計画の立案と実践の間の矢印は指導計画の立案の後に実践があることを意味している。

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

される保育計画は子どもの実態とずれのある計画となる危険性があるであろうし、そうしたずれのある計画に沿って実践を行った場合、その実践内容は子どもにとって必要であることなどとずれてしまう危険性がある。このように、子どもの姿を的確に把握しない場合、保育活動全般に渡って不具合の生じる危険性が考えられる。したがって、保育者の知覚が自身の願望や希望によって歪められていることは好ましいことではない。しかしながら、知覚が予期や構えによって歪められることはよく知られた事実である。

マズロー (1987) は、自己を尊重している人間の知覚は歪曲されることは比較的少ないが、そうでない人間の知覚は願望や希望により歪曲されると考えている。仮にそうであるならば、保育者が自己を尊重しているか否かというちがいが、彼らが子どもの状態を把握しようとする際に影響を及ぼすことが予想される。そこで、本研究では、保育者養成課程に在籍する学生を対象にし、自己評価と子どものイメージとの関連を調べることにした。

自己評価とは一般に人が自分をどのような人間であるかについて考えていることを指す。溝上 (1999) は肯定性次元 (社会- 自己基準) と否定性次元 (社会- 自己基準) との別を考慮した自己評価尺度を作成している。この尺度は、肯定性次元と否定性次元、社会基準と自己基準とを組み合わせた4つの下位尺度 (社会肯定、個人肯定、社会否定、個人否定; 表1参照) から構成されている。さらに尺度ごとに得点の高低が算出されるため、2 (社会肯定) × 2 (個人肯定) × 2 (社会否定) × 2 (個人否定) より、各調査対象者は16のタイプのいずれかに振り分けられることになる。例えば、社会肯定と個人肯定の得点が高く (H; high の意味)、社会否定と個人否定の得点が高い (L; low の意味) 場合は HHLL と表記され、逆に、社会肯定と個人肯定が低く社会否定と個人否定が高い場合は LLHH と表記される。

表1. 溝上 (1999) の自己評価尺度の下位尺度

構成概念	項目例
社会基準肯定	私は、自分のことを周囲の人とは異なる優れた存在だと思います。(他6項目)
自己基準肯定	私は、理想通りではないが、自分というものが好きです。(他6項目)
社会基準否定	何かにつけて、自分は役立たない人間だと思います。(他6項目)
自己基準否定	私は、時々自分自身が嫌になるときがあります。(他6項目)

HHLL 群は個人的にも社会的にも自己充足している群であり、LLHH 群は個人的、社会的にも自己に対して不満をもっている群であるといえよう。マズロー (1987) は自己実現的人間の特徴として、「安全、所属、愛、地位、自己尊重の欲求について (1987) という特徴を挙げているが、この特徴は溝上は既にそれらは満たされている」(p. 301, マズロー, (1999) の尺度から分類される HHLL 群の示す特徴と同じと見てよく、HHLL 群はマズロー (1987) のいう自己充足した人間であると言ってよいであろう。実際、自己評価尺度と YG 性格検査との関連を調べた溝上 (1999) の研究の結果からは、HHLL 群は抑うつ性や劣等感が低く、活動性や社会的外向性の高いことが分かっている。一方、LLHH 群は抑うつ性や劣等感も高く活動性も社会的外向性も低いことが報告されていることから (溝上, 1999), LLHH 群は自己充足したとは言えない群であるといえよう。

それでは、この自己評価という点から見た場合、自己評価の低い群と高い群とでは物事のとらえかたにちがいはあるであろうか。マズロー (1987) に従えば、自己充足していない人間の知覚は自己充足している人間の知覚に比べて歪みが大きいと考えられる。この点について、本研究では溝上 (1999) の開発した尺度を用いて調査対象者をタイプ分けし、自己評価の低い群と高い群というちがいによって子どものイメージが異なるか否かを検討することを目的とする。

なお、前述した通り、溝上 (1999) は社会基準と自己基準の2つの基準を組み合わせ、調査対象者をタイプ分けしている。このように変数を組み合わせるには、2変数が相互に独立した変数である必要がある。しかしながら、溝上 (1999) 自身も指摘しているように、自己基準は社会基準に内包される基準であり、自己基準と社会基準といった変数を独立した変数と考えることは難しい。2変数が独立であるとの想定ができない以上、2変数の組み合わせから調査対象者をタイプ分けすることはできない。そこで、本研究では、社会基準と自己基準を組み合わせず、それぞれの基準ごとに調査対象者をタイプ分けし、それぞれの基準でタイプ分けされた群の間で子どものイメージにちがいはあるか否かについて分析を行うことにした。

また、本研究では既に現場で勤務している保育者を調査対象とせず、保育者養成課程に在籍する学生を対象とした。保育者を対象とした場合、現在何歳の担任であるかによって、子どものとらえかたが異

なる可能性や、各保育所・幼稚園によって子どもの特性も異なることが予想されたためである。

結果

方法

調査時期 2001年8月。

調査対象者 H県内の保育者養成課程に在籍する専門学校生73名。全て1年生であった。

自己評価尺度 溝上(1999)の作成した自己評価尺度を用いた。肯定性次元における社会基準項目と自己基準項目、否定性次元における社会基準項目と自己基準項目はそれぞれ7項目であり、合計28項目であった。評定は“全く当てはまる(6点)”～“全く当てはまらない(1点)”の6件法で行った。

子どものイメージの評定 予備調査とした事前に調査対象者に“子ども”という言葉から連想する形容詞を自由に書き出すよう求め、それらをもとに9つの形容詞対を作成した。形容詞対は、熟慮的な-衝動的な、静かな-うるさい、はやい-おそい、清潔な-汚い、強い-弱い、軽い-重い、明るい-暗い、小さい-大きい、かわいい-みにくいであった。

手続き 評定は一斉に行なった。自己評価尺度と子どものイメージの評定は別々の日に行なった。

自己評価タイプの作成 溝上(1999)に従って、自己評価の各下位尺度の得点が絶対得点の50%以上を高群(H)、50%以下を低群(L)と分類した。さらに、自己基準・社会基準の2基準ごとに、肯定的評価と否定的評価の高低の組み合わせから、HH、HL、LH、LL群の4群に分類した。HH群とは、肯定的評価、否定的評価ともに高い群であり、HL群とは肯定的評価が高く否定的評価の低い群であり、LH群とは肯定的評価が低く、否定的評価の高い群であり、LL群とは肯定的評価、否定的評価ともに低い群である。なお、試みに社会基準と自己基準との組み合わせによって調査対象者を16タイプに分類したところ、各タイプが全体に占める割合は、LLHH(25%)、HHLL(16%)、HLHH(16%)、HHHH(8%)、HLLH(5%)、HLHL(5%)、LHHL(4%)、LHHH(4%)、LLLL(3%)、LLHL(3%)、HLLL(3%)、HHLH(3%)、HHHL(3%)、LLLH(1%)、LHLH(1%)であった。また、試みに子どものイメージに関して、HHLL群とLLHH群のプロフィールを図2に示した。

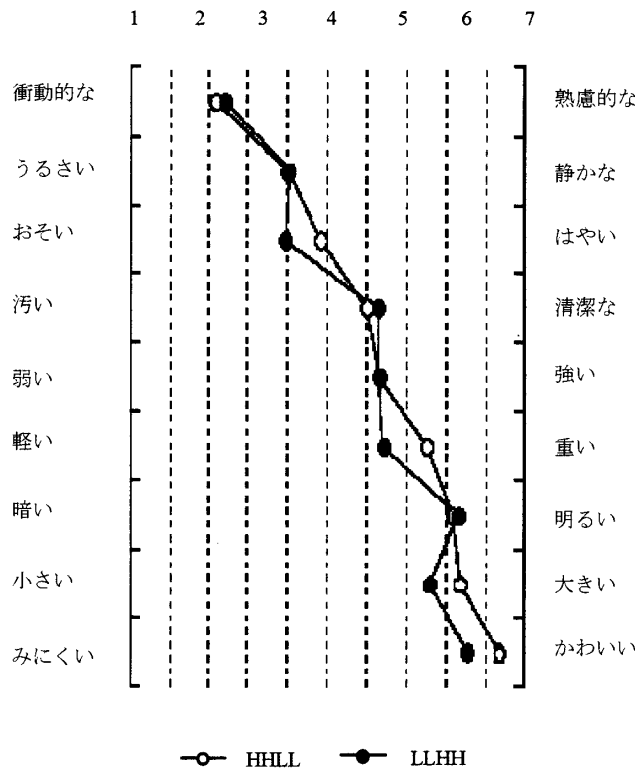


図2. HHLL群とLLHH群の子どものイメージ

注: HHLL群, LLHH群の人数はそれぞれ17名, 12名であった。

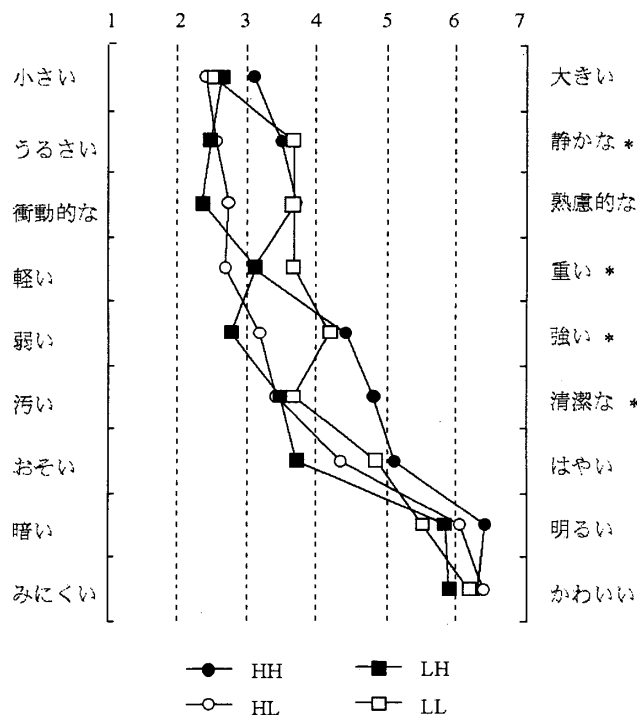


図3. 社会基準による各群の子どものイメージ

注：アスタリスクは群間の平均値の差が有意水準 ($p = .05$) に達したことを示す。

社会基準による自己評価タイプと子ども像

子どものイメージに関して、社会基準によって分けられた各群のプロフィールを図3に示した。HH, HL, LH, LL群間で、子どものとらえかたにちがいがあつかあるか否かを調べるために、子どものイメージの9項目それぞれについて群のちがいを要因とした分散分析を行った結果、「うるさい- 静かな」、「弱い- 強い」、「軽い- 重い」、「汚い- 清潔な」の4対で群間に有意な差があった。その他の対については両群に差はなかった。

「うるさい- 静かな」の対で群間に有意な差があった ($F(51,3)=4.02, p < .05$)。LSD法による下位分析を行った結果、LH群はHH群より評定値が低かった ($p < .05$)。すなわち、LH群はHH群より子どもをうるさいものとしてとらえていることがわかった。また、HL群やLH群はLL群より評定値が低かった ($p < .05; p < .01$)。すなわち、HL群やLH群はLL群より子どもをうるさいものとしてとらえていることがわかった。

「弱い- 強い」の対で群間に有意な差があった ($F(51,3)=7.52, p < .01$)。LSD法による下位分析を行った結果、LH群はHH群やHL群、LL群より評定値が低かった ($p < .01, p < .05, p < .01$)。すなわち、LH群はHH群やHL群、LL群より子どもを弱いものとしてとらえていることがわかった。また、HL

群はHH群やLH群、LL群より評定値が低かった ($p < .01, p < .01, p < .01$)。H群やHL群はHH群やHL群、LL群より評定値が低かった ($p < .01, p < .05, p < .01$)。すなわち、HL群はHH群やLH群、LL群より子どもを弱いものとしてとらえていることがわかった。

「軽い- 重い」の対で群間に有意な差があった ($F(51,3)=3.51, p < .05$)。LSD法による下位分析を行った結果、LH群やHL群はLL群より評定値が低かった ($p < .05, p < .01$)。すなわち、LH群やHL群はLL群より子どもを軽いものとしてとらえていることがわかった。

「汚い- 清潔な」の対で群間に有意な差があった ($F(51,3)=4.03, p < .05$)。LSD法による下位分析を行った結果、HL群やLH群、LL群はHH群より評定値が高かった ($p < .05, p < .01, p < .01$)。すなわち、HL群やLH群、LL群はHH群より子どもを汚いものとしてとらえていることがわかった。

自己基準による自己評価タイプと子ども像

子どものイメージに関して、自己基準によって分けられた各群のプロフィールを図4に示した。HH, HL, LH, LL群間で、子どものとらえかたにちがいがあつかあるか否かを調べるために、子どものイメージの9項目それぞれについて中央値分析を行った結果

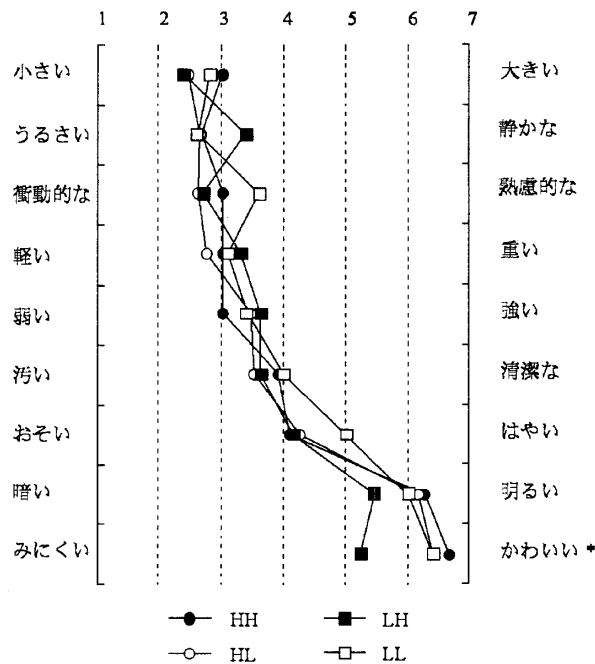


図4. 自己基準による各群の子どものイメージ

注：アスタリスクは群間の平均値の差が有意水準 ($p = .05$) に達したことを示す。

、「みにくい- かわいい」の対で群間に有意な差があり ($F(51,3)=3.88, p < .05$), LH 群は HH 群や HL 群, LL 群より評定値が高かった ($p < .01, p < .01, p < .05$)。すなわち, LH 群は HH 群や HL 群, LL 群より子どもをかわいいととらえる程度が小さいことがわかった。

考察

本研究の目的は自己評価タイプのちがいと子どものイメージとの関連を調べることであった。自己基準によって調査対象者をタイプ分けした場合, LH 群は HH 群や HL 群, LL 群より子どもをかわいいととらえる程度が小さいことがわかった。LH 群とは肯定的評価が低く, 否定的評価の高い群であり, 自分の負の部分大きくとらえている群である。すなわち, LH 群は自己評価の低い群といえるが, このように, 自己評価の低い場合, 他者の評価も低くなる結果が得られた。この結果は自己評価と物事の知覚とが関係していることを示す結果である。

社会基準によって調査対象者をタイプ分けした場合でも, 「うるさい- 静かな」, 「軽い- 重い」, 「汚い- 清潔な」の3対に関して, LH 群は他の群よりも子どもにネガティブな評価を行う傾向があった。すなわち, LH 群は他の群に比べて子どもをうるさく, 軽く, また, 汚いと評価する傾向があった。子どものイメージに関するプロフィール (図2) から

も, 全体的に LH 群は他の群に比べて子どもに対して負のイメージをもっていることが推測される。以上の結果は, 自己基準の結果と同様, 自己評価と物事の知覚とが関係していることを示唆する結果である。

また, SD 法をもちいた先行研究からは, 価値, 力量性, 活動性といった3つの因子が抽出されることが知られている。評価因子とは, 「かわいい」「明るい」「清潔な」といったものの特性の評価にかかわる因子であり, 力量性因子とは, 「大きい」「重い」といったものの物理的性質にかかわる因子であり, 活動性とは, 「静かな」「強い」「はやい」といった活動の性質に関わる因子である。上述のとおり, 本研究では社会基準と自己基準のそれぞれの基準ごとに調査対象者を分類し分析をおこなったが, 個人基準では「みにくい- かわいい」といった評価因子にふくまれる対に関してのみ, 群のちがいが有意水準に達したのに対して, 社会基準では「汚い- 清潔な」といった評価にかかわる対のほかに, 「うるさい- 静かな」といった活動性にかかわる対や, 「軽い- 重い」, 「弱い- 強い」といった力量性にかかわる対でも群のちがいが有意水準に達した。この結果は, 自己基準による評価と社会基準による評価とで, ものとのとらえかたに影響する側面が異なることを示す結果であると考えられよう。

以上, 本研究の結果, 自己評価と子どものとらえかたとの間に関連のあることが示された。前述した

とおり、子どもの姿の把握は保育活動の出発点であり、保育者の子ども姿のとらえかたによって後の保育計画の立案、実践等に影響を及ぼすことが予想される。そのとらえかたに歪みがある場合は、子どもの実態に即した保育活動を行うことが難しくなる。特に、大半の幼稚園・保育所では1クラスの担当教諭・保育者は1名であるから、クラス内で他の保育者と意見交換する機会は少ないため、積極的に自身の子どものとらえかたが適切かどうかを他の情報提供者の協力を得ながら確認していく必要がある。

その情報提供者には、他の保育者、保護者、研究者の3つがある。例えば、近年、「カンファレンス」と呼ばれるようになった園内の保育者で行う研究会がある。この研究会では、特定の子どもについて担任でない他の保育者が観察を行い、その行動の所感などを述べ合い、その問題点や介入・支援方法などを話し合う。この活動を通じて、担任保育者は自分自身の子どものとらえかたに歪みがあるかどうかを確認することができる。

しかしながら、保育所の場合は保育時間が長いことや、保育者ごとに勤務時間がちがうため、保育者が集まって頻繁に研究会を設けることは難しいと思われる。研究会を多くもてない場合は、その補償として、別の情報提供者の協力を得る必要がある。子どもと最も長い時間を共有し、その発達を観察してきたのは子どもの保護者である。行動を把握するには、その行動の起きた前後関係の理解が必要となるが、保護者は長期間子どもと接しているため、1つ1つの行動の意味を保育者よりも把握している可能性がある。多くの園では保育者が各幼児の行動を保護者に報告したり、保護者が子どもの体調などを保育者に報告する「連絡帳」が用いられている。保育者のとらえた子どもの姿を保護者に伝え、それに対して返答してもらうという方法によって、保育者のとらえかたを確認することができるであろうし、また、各行動の意味についても深い洞察を得ることができるであろう。

3つ目の情報提供者には、研究者がある。多くの研究者の関心は、一般的に子どもはどのように発達していくのかにあるため、基準化された尺度や測度をもっている。これらの尺度を用いて行動特徴や心的特徴から子どもを分類することができる。研究者の提供する情報と各保育者の子どものとらえかたとは必ずしも一致しないであろう。不一致が生じたと

き、その理由を保育者・研究者ともに考察するであろうが、そうした考察を両者が共同して行うことによって、子どもの理解がより深まるであろう。

以上、自己をどのように評価しているかということが、子どもの知覚に影響することを示した。この結果より、保育者は自分自身のものごとのとらえかたの傾向を把握し、自分自身のとらえかたと他の保育者のとらえかたとを比較しながら、自分のとらえかたに歪みはないかどうかを確認する作業が必要であるとことを述べた。

今後の課題

本研究では、9対中、群間で有意な差があったのは社会基準では4対、個人基準では1対だけであり、この結果をあらゆる事柄の知覚に一般化することはできない。本研究において群の研究で示唆された自己評価と知覚との関連を検討していく必要がある。

また、本研究では社会基準による評価と自己評価による評価とでは、ものの知覚に影響する側面が異なることが示唆されたが、社会基準による評価は、どういった環境でどのような人と一緒に生活や仕事をするかによって異なることが予想されるため、例えば、保育者となり勤務する職場の物的環境や人的環境のちがいによって社会基準による自己評価にちがいが生じ、その結果子どものとらえかにもちがいが生じる可能性が考えられる。したがって、今後保育者を対象として調査を行う場合、園環境の諸変数についての回答を求め、それらの変数と社会基準による自己評価との関連、あるいは、自己評価と子どものイメージとの関連を検討する必要がある。

引用文献

- マズロー, A. H. 小口忠彦(訳) 1987 人間性の心理学 産業能率大学出版部 (Motivation and personality. 2nd ed. Harper & Row).
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論 金子書房.
- 森上史朗・高杉自子・柴崎正行(編) 1999 幼稚園教育要領解説 フレーベル館.

(指導教官: 山崎 晃)